

我が國家の成立と現代思潮の趨勢

文學博士 加藤 立智

今日は本會の終身會員であります嘉納純君の御幹旋に依て財團法人明治聖徳記念學會の地方講演會が御影の此師範學校講堂に於て開かれまするに就きまして、私も一方では財團法人明治聖徳記念學會の理事として、又他方には同學會から派遣の一講師として此演壇に立つことを許されましたのは、私の光榮と致す所であります。私の専門の學問である宗教學殊に其方面から這入つて研究を進めて居ります神道といふやうな側からして、日本の一宗教學者が我國体に就て考へて居る所を是から申上げ延いて、さういふ日本の國體と現代思想とが如何なる關係に於て存して居るかといふことの卑見を述べまして、諸君の御清聽を煩したいと思ふのであります。

世界の宗教を比較研究いたしますといふと、大体佛教を中心とした所の神人同格教とそれから基督教を生出した所の神人懸隔教の此二つの潮流が今日まで存して居つたといふことが分るのであります。神人同格教は印度から波斯、希臘、羅馬等のアリアン人種の間に行はれた宗教でありますし、神人懸隔教は後に基督教になつた所の昔の猶太教の思想、それから基督教が生れてから後餘程經つて出ましたモハ

メット教の思想が之を代表して居るのであります、神人懸隔教は神と人間との間を馬鹿に離して考へる流儀の宗教であつて人は何處まで行つても神となることは出來ず、神は遠く人界を超越して存在して居ると考へる流儀の宗教であります。モハメットが自ら神を以て任せず又神の位置を稱せずして唯神の意志を人に傳へる神の僕即ち豫言者に過ぎないと稱して居つたのも即ち人間は神に近付くことが出來ないといふ思想を現はして居るのであつて、是れは神人懸隔教の特色でありますが、又基督教以前の猶太人の宗教であつた猶太教も其宗教的天才であつたモーゼすらも神の顔を仰ぎ見ることは出來ないで唯其裾の方を見てシナイの山で十誡を授かつたやうに舊約全書の一傳説が存して居りますから、矢張り神人懸隔教の特色を發揮して居ると思ふのであります。之に反して神人同格教になりますといふと、神と人間との間の區別は殆ど没却されました、人も悟れば佛になれるし佛も亦人間の形を取つて此世に現れて衆生濟度をしに來ることが出來るといふ風に考へるのであります。釋迦の如きも元は人間であつたのでありますけれども、宇宙の眞理を大悟徹底した結果、爰に佛陀覺者となつたのであつて、即ち佛教以前の婆羅門教といふ印度の宗教が希望して居つた所の宗教的理想を釋迦の一身に體現して釋迦は生きながら人間であつて而かも梵天即神以上の位置に上つたと見られたのであります。即ち釋迦は眞の神の位置に上つたといふことに宗教學上からは觀察されるのであつて、神人同格教でなければ人間が神となることと釋迦の場合の如きものを見ることが出來ぬのであります。又希臘羅馬の宗教上に於きましても是と同

じく神人同格教でありますから、昔の希臘人はアレキサンドル大王或はリサンドルスといふ希臘の水師提督を神禮を以てかしづき、又羅馬に於きましても盛んに歴代の皇帝を崇拜した皇帝崇拜が現れて參つたのであります。有名な英雄であるシーザーとかアウグスツス皇帝とかいふ方は皆神としての禮遇を受けて居つたのであります。是等は皆神人同格教の最も好き例であります。

羅斯の如く基督教及び佛教を中心として空間的に宗教なるものを觀察しますといふと、神人同格教と神人懸隔教の二大區別が宗教界に存して居るといふことを知ることが出来るのであります。今度時間的に宗教の發達を考へて見ますと、宗教は自然的宗教と倫理的宗教とに分たれるのであります。即ち自然的宗教といふのは自然民族の中に行はれて居る宗教であつて極めて其發達が幼稚な宗教であります。進んだ倫理道德や進んだ哲學の如き知識の要素が全く缺けて居るのであります。之に反して宗教が倫理的宗教と稱せられる所の時代に這入りますといふと、其中に倫理道德の要素や知識の要素が非常に多く現れて參るのであります。學者は之を知的倫理的宗教などいふ名を附けて呼びますし、前者は野蠻人の宗教であるに對して後者は之を文明人の宗教といふ意味で文明教などと稱して居るのであります。

日本固有の宗教は、全体神人懸隔教か神人同格教か何方であるかと斯ういふ問題になりますと、私は日本固有の宗教は何方かといふと神人同格教の色を餘計帯びて居ると申したいと思ふのであります。即ち日本人は人間の中に神を見るといふことは當然のこととして信じて居つたことは我古い歴史の證明す

る所でありまして、之を國家の方面政治の方面、國体の方面と結びつけて考へます時には、我天皇に直に明神を拜して天皇のことを現人神若くは明神、現御神と申上げて居つたといふことに依ても直に知ることが出来るのであります。是は神人同格教の思想の傾向でなければ斯ういふ考にはなつて來ないのであります。其點に於ては日本の古い時分の宗教思想は丁度羅馬の皇帝崇拜と同じやうな風に出て來て居ることが分るのであります。加之先程も申上げました通り希臘に於てはリサンドロスといふ英雄を以て神としたのであります。日本に於てもそれと同じことであつて例へば日本武皇子が非常に武力絶倫であらせられたといふ點から之を神であるとか考へたといふことが日本書紀の中にも出て居りますし、又源義家が非常に弓を射ることが上手であつて鎧三つ一本の矢で之を射て貫いたといふ點からして、さういふ人は即ち神であるといはれたといふことが扶桑略記といふ歴史の中に見えて居りますのみならず、更に古い所に遡つて考へて見ますといふと、神武天皇は天照神アマテラスと其生前からいはれて居つたといふことが現れて居るのであつて、是等の例は日本の宗教思想が神人同格教であるといふことを容易に證明して餘りあるものであると私は思ふのであります。併し今申上げた例の如きは自然的宗教時代に於ける神人同格教であるか、知的倫理的時代に於ける神人同格教であるかといふと、何れも皆自然的宗教時代の神人同格教の實例であると私は見たいと思ふのであります。それは既に申上げた如く日本武皇子にしる源義家にしる、皆腕力が強い武力が強いといふ點で之を神と考へたのでありますから、全く其考が物質的で

あつて精神的、倫理道德的ではないのであります。即ち自然的であります。然るに段々日本の宗教思想が進むに従つて其考が知的倫理的に動いて來て、東鑑に於て北條時頼のことを書いたことなどを見ますといふと、最早其時代の宗教思想は儒佛の影響もありますけれども、神人同格教が知的倫理的時代に這入つたことを示して居るのであります。即ち東鑑の記者は北條時頼が死ぬ所を書いて、あの人は非常に生きて居る中から人民を治めることに骨を折つて民に仁政を施いたのであつて、あゝいふ人が即ち矢張り神佛の現れであるといつて北條時頼が死んだ時に人民が集り來つて之を禮拜したといふことを東鑑の記者は書いて居るのであります。即ち仁君であるといふことから北條時頼に神佛の現れを見たのでありますから、是は知的倫理的宗教意識の方から來た神人同格教であるといはなければならぬと思ふのであります。此意味で北畠親房卿の著と稱せられて居ります二十一社記に「身正心明我身即神也天皇詔書明神天皇とあるも此の義也」と載せてありますが、是等も亦明かに知的倫理的宗教時代に於ける神人同格教であるといふことを知ることが出来るのであります。何故なれば身正心明とは續日本紀などにいふ所の清明正直の心といふことになるのでありますから、明かに是は倫理道德上の言葉でありまして、さういふ身正しく心明かな人がそれは即ち神であるといふことになるならば、耶蘇が「心の清き者は福なり其人は神を見ることが出来る」といひ、佛教が「自ら其意を清うすることそれが佛の教である」と説いたのと同じことになるのであつて、立派に倫理的知的時代の宗教思想の標本といふことになるのであり

ます。さういふ知的倫理的宗教時代の考を以て天皇に明神を拜するといふことになれば、日本の天皇教は知的倫理的宗教の時代まで自然的宗教の時代から一貫して存して居つたといふことを知ることが出来るのであります。爰に吾々は明治神宮が起り又降つては乃木神社が起つて來るといふことの意味を觀取しなければならぬのであります。吾々が明かに知的倫理的宗教思想を以て明神を拜することの出來た近い例は即ち明治天皇であります。明治天皇が御在位四十五年の御生活は全く純沒我的の御生活であつて身正し心明かな明津神の實現であります。

とこしへに民安かれと祈るなる

我世を守れ伊勢の大神

の御精神を以て人民の爲に一意専心政治を看そなはせられた其明かな心、其正しい御仕業に至つては爰に神の光を拜せざらむと欲するも得ざるのでありますからして、知的倫理的時代の皇帝崇拜は日本に於て明かに其實例を見ることが出来るのであります。

斯う考へて參りますといふと、日本の皇位は即ち神位であるといふことになるのであつて、天皇は一方からは人間に坐ますけれども他方に於ては神に坐ますといふことになるのであつて、之を昔から明神と稱して居つたのであります。此處は餘程隣國の支那の建國の精神とも違ひ、又日本と同じやうに祭政一致を以て國を立て、居つた猶太の建國の精神とも違ひ、延いては猶太の宗教であるエホバが進化して

基督教のゴッドになつて其教へを採用した所の歐羅巴各國の建國精神とも大に違ふ所であると私は考へるのであります。即ち支那の場合に於ては天を上帝と呼んで之を一番高い神として古代の支那人が崇拜して居つたのでありまして、其下に君主といふものが立つて其天の意を受けて人民を極公平に治めて行く、それが一番善い所の君主であつて若夫れ人民の意向に逆らひ下人民を虐待するやうな君主ならばそれは天の意に適はぬ君主であり、上帝の意に背いた君主であるからさういふ君主は、之を殺してしまつても構はぬといふ考を古代の支那人は有つて居つたのであつて、爰に湯武の放伐といふやうなことも起り、易姓革命の國と支那はなつて遂に今日の共和政體に迄變つて來たのであります。即ち支那人は其建國の昔からして終始變らない所の神を天に認めて人君は其天の命令を受けて下人民を治めるものとしたからして其天の命令に背人君即ち人民を虐げる人君は之を廢してしまつて構はぬといふ考に自然なつて來なければならぬのであります。支那の天子は丁度日本の將軍のやうな位置を採つたと昔からいうて居るのは此に淵源するのであります。又猶太の場合も同一でありまして、猶太には昔王様は無かつたのであります。然るにソールといふ人が亞米利加の大統領を選擧するやうな風に猶太人の中から擧げられて君主となつて其上にエホバの神が立つてそれが人民の信仰を繋いで居つたのであつて、其神は猶太人の無形の君主であつて是は終始一貫變らないものであることは、支那人の所謂天即ち上帝の位置を取つたのでありますから、其人民とエホバの間に立つた君主は人民を虐げるやうなものであるならばエホバ

の意に適はぬから廢立を議して宜いといふ結果になつて居ると私は考へるのであります。それであるから猶太の王家の始終變つて居ることは支那の場合と同じことであつたのであります。其信仰が流れ、今日て歐羅巴に這入つて今日の基督教國なるものを歐羅巴に形造つて來て居るのでありますからして、今日歐羅巴各國の國體、亞米利加は無論のことでありませうけれども、是等が皆易姓革命の國であつて君主が矢張り支那の君主と同じやうな位置を取り、其上にゴッドが立つて居るといふ風に國家が成立して居るのは寧ろ當然であると思ふのであります。然るに日本は前申上げた通り其自然的宗教時代からして文明の時代即ち倫理的知的の宗教時代に終始一貫して先づ猶太人の變らぬものである所のエホバ、支那人の變らぬものである所の天若くは上帝の位置を我明津神天皇に拜して爰に建國の基礎が出來て居りますから、それで「君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」となつて來て居ると思ふのであります。即ち天壤と共に窮りない皇位が連綿として萬世一系で成立つて來て居るといふ所以であると思ふのであります。皇位は即ち神位であつてそれが神武の昔から明治大正の今日まで依然として繼續して居るのであります。

其點を考へると餘程日本は不思議な國柄である、ユニークな國だといふ考を深くされるのであります。昔高天原で天照大神が神に奉る着物を御織りになつて大嘗祭を御行ひになつたことが日本書紀に記してありますが、それが今日にも由基殿主基殿の御儀にも遺つて居つて、之が即ち今日の言葉でいへば

祭政一致の我國體であるといはれ、西洋語を藉りて之を申せば日本はセオクラチック、ガバーメント即ち神政統治神權統治の國體といふことになつて來るのであります。西洋各國に於ては此セオクラチックガバーメントといふものは早く滅びてしまつたのであります。猶太の如きも元はセオクラチック、ガバーメントでありましたが、直き國は亡びてしまつたのであります。それが二千何百年繼續して居るものは獨り我日本のみであるといふことになるのであつて、皇位は即ち神位である所のセオクラチック、ガバーメントが今日我日本に尙ほ存して居るのであります。

加之尙ほ目を轉じて考へて見ますと、其神位を踐み給ふ天皇は即ち日本特有の國家的即ち綜合家族制といふものゝ上に立つておるでになる。西洋の學者の言葉でいへば是は一族のバトリヤカル、ガバーメントで、族父政治若くは父長政治氏族統治の國柄といふことが出来るのであります。而して此日本の國家族制といふものは同じ家族制であつても希臘や羅馬や支那あたりの家族制と非常に違ふので、是等諸國の家族制は個々の家族制でありますが、日本のは國家を中心として出來上つた國家的家族制であるといふことに其特長が存して居るのであります。さうしてそれが二千何百年續いて來て居つて、今日尙ほ父長政治即ちバトリヤカル、ガバーメントを有つて居るのであつて、斯ういふ國柄は實際西洋各國の文明國といはれて居る國々の間にも見るこの出來ない不思議な現象といはざるを得ぬのであります。而して此父長政治の父長の位置に立たせられる天皇が同時に宗教的に觀察すれば神位を踐み給うた御方

であつて、即ちセオクラチック、ガバメントとパトリヤカル、ガバメントが日本に於ては一つになつて存して居るといふ所に日本國家の非常に堅い點があり、人民がさういふ父長であつて同時に明神に坐ます上御一人に對する時の精神状態が全然宗教的に現れて來るといふ、さういふ特色を存して來るのであつて、爰に日本の建國が支那及び西洋各國と違ふ所があり、日本の上下の關係が西洋各國と趣を異にして居る点を發見して來るのであります。それは丁度西洋家屋を造るのに煉瓦とセメントとを以て其家屋を堅うするといふ譯で、父長政治の國柄と神政統治の國柄とが一つになつて居るといふ所に煉瓦とセメントとの二つで西洋家屋が堅くされて居ると同様の趣を有して居ると思ふのであります。

加之其父長政治なり或は神政政治なりが二十世紀の今日まで合同して尙存して居ると同時に日本は先年西洋各國の文明を輸入しまして憲法政治を布いたのでありますから、是は即ちコンスチテューショナル、ガバメントといはなければならぬのであります。即ち立憲君主政体の國家であります。之が今の父長政治と神政統治と一緒結び付いて居るなど、いふことは最も不可思議な現象であつて西洋諸國には到底見ることの出來ぬ特色であると思ふのであります。さうして憲法を布かれて日本臣民の權利と義務とが明かに規定され、上御一人は矢張り父長の御位置を以て下人民を親が子を愛する如き大御心で御愛しみ遊ばすといふ所に此麗はしい日本の上下主従の關係を見ることが出來、皇室と臣民との麗はしい關係が現れ、義は則ち君臣にして情は父子を兼ねの美點が其處に現れて來ると私は考へるのであります。

日本の國家の成立が斯ういふ風な特色を有つて居るといふことになつて來ますといふと、此日本の國家成立の思想と目下行はれて居る所の所謂現代思想の潮流なるものとどういふ風な關係を有つて居るかといふことを深く考へて、苟も生を日本に受けて居る所の吾々は餘程注意を國家の爲にしなければならぬことが起つて來ると思ふのであります。即ち前から申上げた通り日本の國家は倫理的知的の宗教時代にまで入つて、其君主が明津神の位置を御取り遊ばして居るといふ信仰の下に此國家が成立ち、其處に臣民の皇室に對する關係が宗教的熱烈な眞情を以て現れて皇室の御爲めならば水火も避けないといふ熱烈な愛國心となつて現れて來るといふ點を考へて見ますと、現代思想が丁度其正反對で、さういふ倫理的知的信仰の基礎を擧ろ毀してしまはふとするもので、餘程反對の位置にあるといふことを認めなければならぬのであります。言換へれば吾々の國家は最早今日に於ては精神的原理の下に立つた所の國家であります。人は能く武士道が我國家の上に大切な役前をして居るといふことをいふのであります。其武士道なるものは何であるかといふと、生を捨て、義を取るといふ所に其一つの特色を存し物質よりも精神を重んずるといふ所に武士道の特長が現れて來るのであります。痛いことでも忍耐して義を立て通すといふ所に其精神があるのであります。物質的にいへば赤穂四十七士のやつたことの如きは實に馬鹿々々しいことであるかも知れぬのであります。皆君主の爲に腹を切つて死んでしまつたのでありますから詰らぬことであるかも知れぬのであります。又楠木正成の死を權助の死と同様に物質的の立場から考

へれば考へられるかも知れぬのであります。併ながら精神的方面を顧慮して立論して來ると、其處に立派な道徳的の意味が発見されて來て、爰に赤穂四十七士の死も楠木正成の死も其存在の理を明かにされて來るのであります。是れ即ち我國家の成立、民心の根底が精神的方面に重きを置いて居る結果だと思ふのであります。然るに現代思潮はどうかといふと、總て物質的であります。自然科學の發達からして飛行機や飛行船や潛航艇、所謂物質科學の結果を綜合して造つてやつて見たのが今回の戦争であつて、總てそれ等は物質的勢力を以て他人の國家を脅威せむとしたのであります。其他交通機關のことを考へて見ましても、總て物質的思想にのみ動もすれば囚はれむとする傾があるのみならず、近來此戦争の結果色々の社會問題勞働問題思想問題等々色々のものが出て來て色々に衝突矛盾を來し、而てその問題解決の基調はと云へば何れも物質の偏重主義であります、是くの如きは邦人の大に考へなければならぬ所だと思ひます。何せかと申しますと、前申上げたやうに日本の國家は其成立上非常に精神的の要素に富んだ國家であります、そこで此國家と物質的思想の潮流とが今衝突して居るのであります。精神的なる我が國家が成立つて行くか、物質的の惡風潮の爲に悉皆破壊し去られてしまふかといふ時に際して居るのであつて、今日は唯安閑として泰平を夢みる時ではないと思ふ。平和博覽會が東都に開かれて如何にも世間は平和のやうに皮相的には觀察をされますし、又華盛頓會議が開かれて各國軍備の制限をやつてもう戦争は世界に跡を絶つてあらう、テン、イヤズ、ネバル、ホリデイは少くとも來るだらうと憶測されるので

ありますが、然し何ぞ知らむ中々さう甘くは問屋で卸さないでせう。さういふ点を考へて來ますといふと、吾々は今飛行機や飛行船の襲撃が來ると云ふ狭い意味の戦争は止んでしまつて居りますけれども第一に經濟戦争が各國に行はれ日本品が獨逸品からして世界の市場より驅逐されるといふ有様であるのは、是も立派な經濟と云ふ戦争でありますし、又それと同時に物質萬能を標榜してそれで世界を風靡しようとする世界的大活動が行はれてゐるので、それが危險思想ともいふべき物質萬能のバトルを振まいて、健全なる思想を毒し比較的秩序整然たる精神的文明を有つて居る國家は之を解体させようと努めて居るといふことを考へて來ますと、今日は大なる思想戰の秋だと思ふのであります。思想界の切崩が諸方に行はれて居るといはなければならぬのであります。回顧すると昔の希臘の國民的宗教は基督教の世界的宗教の爲めになぎ倒されたのであります。今や日本の精神文明は物質萬能の惡風潮の爲めに日本の輕重を問はれんとしてゐる、こゝは吾々が餘程細心の注意を拂つて自ら警戒して行かなければならぬと思ふのであります。樂觀論者の云ふ如くさう云ふ事が無ければ結構だが、明治天皇御隠れになつて既に本年は滿十年であります。本講演も實は其御記念の意味で本會は催すのであります。此十年間に世界大戦争などがあつた爲に世界の思想又日本人自身の思想も餘程變調を來して居るのでありますから、斯ういふ時に當りましては各自銘々能く戒慎して行かなければならぬと思ふのであります。唯徒らに西洋直譯の思想にのみ驅られて、此思想戰の時期に際し彼等の乘する所となつては大變だと思ふのであります。

す。孫子の兵法に「彼を知り己を知る者は百戰して殆からず」というてありますが、彼を知ることの必要は申すまでもない。即ち西洋の文明を十分嚙分けてそれを取つて我滋養分とするといふことは必要であります。それが同時に彼ばかり知つて我を知らないでは大變であつて我を知ること大に努めなければならぬと思ふのであります。此財團法人明治聖徳記念學會の如き一方では國際的頭腦を有つた學者が更に翻つて各自我が精神文明の研究を十分徹底的にやつて彼をして十分に我國の真相を理會せしめ此思想戰の盛んである今日に於て彼も知り己も知つて百戰殆からざる位置に立つて國家をして益々隆盛の域に進め、個人々々眞の幸福を得ることに努めたい考を以て其學究的の仕事に従事して居る次第であります。實に以上述べました我國家の成立等を考へ、而して現代思想の進み流れて行く所の様子を見ますといふと、世の先憂後樂の士が一日も安閑として暮すべき時でないといふことを深く考へさせられざるを得ないのであります。一言今日は以上の諸点に就て所感を述べまして、諸君の御參考に供した次第であります。

